

# ちよつと、話

## 第三五号 みまもり

我々は「オギヤー」と生まれて「ウン」と死ぬまで長短は別にして、それぞれの人生を歩んで行く訳です。その歩みの中に、楽しい事もあれば、辛く悲しい事もあり、重く苦しい事もあれば、軽快な事もあり、味わいは様々です。この世は修行の場、楽しみは少なくして、苦しみは多し」なのです。思う様には中々行かないものです。幼少の物心つかない時より、好きでも無い勉強を強いられ、節目の受験戦争に翻弄され、おちこぼれた生徒は悲惨なもので分からない授業を一日六時間も我慢しなくてはなりません。親はこのような子供をどの様に「見守ったら」良いのでしょうか。人間と生を受けたからには何か世の為に働ける物を持って産まれてくるはずで、それを見つけてやるのが親の務めであると思います。が親には成れても務めを果たすのは難しい事です。親の「エゴ」で子供の多くが育っているのではないのでしょうか。子を育てるのには親の眼力がどれ程なのか問題になるところです。子供が成長して社会人となり、自分を見つめなおした時、ああ良かったと言ってくれば結果的に大成功と言えるでしょうが。

お釈迦様が佛教をお開きに成られた、この事は皆様周知のとおりです。

お釈迦様は国王として人間の生活をつぶさに観察され余りにも苦に支配され、苦しむ多くの人々を見るに付け悲哀を感じ、何とか少しでも苦から逃れる方法は無いものかと出家され修行に励まれ佛教をお開きになりました。当山に安置し奉る諸佛、諸菩薩、油掛地藏尊様もその働きはお釈迦様と同じ様に、「みまもり」の姿勢にあります。我々の生活を「見守り」苦界に沈む事の無い様に、「結縁を頂く我々に大難は小難に済むように、少しでも我々の生活がより良く安心安全に過ごせるように「身を守って」頂いていくのです。ですから私達はお地藏様の御尊顔を拝しながらの「おまいり」を欠かす事ができないのです。私は人生における苦界は全て「病」にあると思っております。子供の事や人間関係の心労からくる病、菌に苛まれる病、仕事の悩みからくる病、等々生きる、生きて行くには、苦難の道、即ち病の街道があるのです。マイナスは全て病と捉えて過言ではなからうか。ですから人生は病の道を如何に乗り越えて行くかにあると思うのです。そして最後に立ちほだかるのが死です。でも心配はいりません。なぜならばお地藏さまは錫杖を持ってこの世と彼の世の橋渡しをして下さる役目を持っていらっしゃるからです。私も五月は錫杖を持って四国を巡錫します。千千

二十三年五月一日

善壽男善入院油掛地藏尊